

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370500540		
法人名	特定非営利活動法人NPOみなまた		
事業所名	グループホームふれあいの家		
所在地	水俣市月浦213番地1		
自己評価作成日		評価結果市町村受理日	令和4年3月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

住宅地ではあるが、周りを畑やみかん山に囲まれ、四季折々の自然を感じることができる、恵まれた環境に建っている。施設内はすべてバリアフリーになっており、利用者が重度になっても対応できるようにしてある。入居者一人ひとりのペースに合わせ、さりげなく見守るケアを職員一同心がけている。毎月職員が感じた利用者の様子を報告し、小さな変化も見逃さないようにしている。食事の前にはリハビリ体操や口腔体操を行い、体を動かし誤嚥予防につなげている。コロナ禍のためのいろいろな制限があるが、オンライン面会や玄関前での短時間での面会を行い入居者、家族、親しい人とのつながりが切れないようにしている。また、敷地の前の畑は地域で開放している。畑でとれた野菜はグループホームでの食材として利用しており、コロナ禍においても多少なりの関わりを持つことができていた。以前は地域の祭りの場所として提供し、地域住民と入居者との関わりを持つことができていた。コロナ感染が落ち着けば再開したいと地域の人と話している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1		
訪問調査日	令和4年2月15日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

職員は、利用者のその日、その時の気分に合わせてマイペースな生活を支援している。利用者の希望や訴えに真摯に向き合い、その都度、対話を重ね安心して繋げている。コロナ禍のため以前のような交流は出来ないが、住民から季節の花が届いたり、散歩中、挨拶を交わすなど交流している。このように、利用者の日常の暮らしに理念の「人権・安心・共生」の実現が見られた。「利用者の様子」の記録は利用者について全職員が気づいたことを記録している。職員の視点の相違が新たな発見をもたらす気づきを深めている。気づきを精査することで利用者を深く知る事になりケアプランに反映し、その人らしい暮らしを支援している。開設時から積み重ねてきた地域交流が住民・利用者・職員の間で豊かな関わりを生み、助け合う当たり前の暮らしを実現している。「ふれあいの家に行けば何とか」と言ってもらえる、地域住民の安心を支援する存在でありたいと考え、日々努力している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「人権・安心・共生」を基本理念とし、玄関、事務室に掲示、職員は理念に沿ったケアができるよう日々、共有している。また年度初めには基本理念の法人内研修を行っている。	年度初めの法人研修を始め、毎月のミーティングで理念の内容について意見交換し、理念を共有している。利用者のマイペースな生活や利用者の希望を尊重する事、利用者の声に真摯に向き合う姿勢、地域との連携が強く、理念の実現が見られた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域の「組」に入り回覧板を回したり日常的な交流がある。また、美化作業や祭りなど地域の行事にも参加しているが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で参加が難しくなったり、行事がなくなったりしている。	理念の一つに「共生」を掲げ、ホームは地域の住民として暮らしている。コロナ以前はホームの行事に地域住民に参加を呼びかけたり、社協の地域リビングに利用者を伴って参加していた。現在は季節の花が届いたり、散歩で挨拶を交わす等、日常的な交流が続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホームでの行事の案内をし、参加してもらうことで、理解を深めてきている。また地域の相談を受ける「地域サポートセンター」としての役割も担っていたが、新型コロナウイルスの流行で活動に制限がかかっている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回、地域の方や行政関係者に参加してもらい開催し、ホーム内の様子や活動を伝え意見をもらっている。また地域で困っている人の情報報告、話し合いも行っている。現在は、集会式の会議は新型コロナウイルス感染対策で出来ていないが、資料配付をして意見をもらったり、情報報告をしている。	運営推進会議はホームの現状を報告し、意見交換を行っている。委員からの地域の身近な情報の提供をもとに検討し、高齢者や困っている人の安心に繋げている。認知症サポーター養成講座を受講した人が学んだことを活かす場として、福祉現場の人材不足の解消につながるか等、多様な視点の検討も見られた。現在はコロナ禍の為、書面で会議を開催し資料を配布している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域密着サービス部会や地域ケア会議、運営推進会議等を通して意見交換・情報提供をしている。市の相談員の来訪は、コロナの影響で中止になっている。集会式の会議の開催が少なくなっている状況。	市の担当者に質問や相談がある際は電話又は直接窓口に出向いて、積極的に意見交換を行っている。ホーム運営に役立つ情報の提供やアドバイスがあるなど、いつも親身になって応じてくれており、気軽に意見交換できる関係を築いている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「身体拘束等適正化委員会」を法人内で設立、運営推進会議、理事会、法人内管理者会議等で毎回意見交換を行っている。また毎年法人内研修で全職員が、身体拘束についての研修を行っている。	身体拘束についての研修はコロナ禍の為、ユーチューブを使った研修を行い、身体拘束をしない意識の浸透を図っている。職員は拘束になっていないか玄関の施錠やベッド柵などを確認し、拘束をしない工夫に努めている。利用者が不穏な際は散歩やドライブをして気分転換を図り、拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員が「虐待防止」について、法人内職場研修を受けている。家庭内の虐待を防ぐため行政との検討を重ね、成果があった事例もある。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内研修で、全職員が学んでいる。社会福祉協議会の権利擁護事業を利用している入居者もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居者や家族との信頼関係関係を築くため、入居時はもちろん入居後も家族との連絡を密にとり、不安や疑問が少しでも解消できるように対応に努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱を玄関に設置してあるが、遠方の家族が多く、来訪されたときに意見要望を聞いている。しかしコロナの影響で来訪も難しくなっているため、電話連絡等で意見要望を聞いている。	面会はキーパーソンだけが予約を取り、窓越しで面会できる。家族の面会や受診時、ケアプランの更新時に利用者の現状を伝え、意見要望を聞く機会としている。月に一度、利用者の近況報告に写真を添えて日常の暮らしぶりを伝え、家族の安心に繋げている。ラインを活用する利用者もいる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月ミーティングを行い、職員間での意見交換をしている。出された意見は管理者が本部に報告し法人内でさらに検討している。法人内の職員集会を年1回開催し、その際、直接職員から意見や提案を出せるようにしている。	年1回開催される法人の職員集会では、「給料を上げて欲しい」「制服が欲しい」「手当をつけて欲しい」など職員の率直な要望が出されている。出された意見要望は法人内で検討し、パート職員に夜勤手当がつくようになった例もある。出来ない事についてはその根拠を明確に示して説明されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者が職場の状況を理事会や法人内の管理者会議に報告し、改善点があったときは検討を行い、就業環境の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内で年間計画を立て、新人研修、現任研修を行っている。ほぼ全職員が研修を受けており、参加職員による研修発表の場も設けられている。外部研修はオンラインを活用している。職員面談を年1回は行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着部会や地区ブロック会でのグループワーク等で他事業所の取り組みを学んだり、交流を深めたりしている。新型コロナ感染対策でZOOM等を利用したオンライン開催に切り替えている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用開始前に担当者会議を開催し、本人や家族の意向・要望を丁寧に聞くようにしている。そしてニーズに合った統一したケアをするために全職員で話し合い、初期の不安や混乱をできるだけ防ぐことで、信頼関係の構築を図っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまで関わってきた人達からご家庭での様子等や困りごとに耳を傾け、些細なことも相談できるような関係が作れるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込み時に相談に乗り、グループホームの特徴を説明している。必要と思われる時は他のサービス利用を紹介する場合もある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事や趣味など本人の得意なことを探し、力が発揮できるような場面を作ったり、昔のことを教えてもらいながら、人生の先輩として接するように努めている。その時方言は貴重なツールとなる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍において面会制限があったりいろいろな制約の中、家族との関係が希薄にならないように努めてきた。電話やビデオ通話等によってホーム内での様子を伝え、互いが安心できるような状況を作ってきた。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今まで関わってきた地域の行事への参加や知人の面会等を継続することでこれまでの関係が途切れないようにしてきている。しかしコロナの影響で外部の方との接触が難しくなっている。またかかりつけ医はできる限り引継ぎ関係が途切れないようにしている。	コロナ前は友人・知人が差し入れを持って訪問したり、持参した弁当で忘年会を行う人もいた。また、地域の花見や敬老会に参加して、在宅時と変わらない馴染みの関係継続の支援に努めていた。現在は電話でお互いに元気である事を伝えている。かかりつけ医は全利用者が馴染みの医療機関を継続している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の性格や相性等も考慮しながら席を決めている。状況を見ながら席の配置を検討。入居者同士の会話がスムーズにいくように職員が間に入って話題を作ったり、入居者同士でくつろげる椅子やベンチを設けている。干渉されたくない人には一人で過ごせる空間を提供している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去された方の家族に対しては必要とあれば相談に応じるようにしている。また退去後に亡くなった方に対しては葬式に行ったりして、その後の関係性も大事にしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々接している中での会話や表情、態度からの意向や希望をくみ取り、気づいたことは記録している。それを毎朝の申し送りや毎月のミーティングで検討している。	利用者のふとした時に漏れ聞こえてくる本音やリラックスした入浴中など、いつも聞けない話を聞くことがある。「〇〇に行くのはイヤ」「△△を食べたい」など利用者一人ひとりについての様子を記録する「利用者の様子」の情報を共有し、利用者の思いに寄り添う支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活歴を家族書いてもらったり、居宅のケアマネから話を聞き、それまでの暮らしぶりの把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その人らしく生活できるように入居者一人ひとりの状況を把握し、共同生活の中で心身に不安なことはないか、日々の生活を見守ることで現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員が日々の暮らしの中での気づきや課題を毎月のミーティングの中で発表し、職員間で検討。その方の状況に沿った介護計画が作成できるように努めている。	「利用者の様子」の記録には「杖を持たないで歩いていた」「〇〇さんの皮膚が赤くなっている」等々、詳細な情報があり、日常の観察と合わせアセスメント・モニタリングを行っている。計画は、ホームが利用者にとって一番安心できる場所となるよう、どうしたら安心を与えられるかをポイントに作成している。それを行うために職員は何が出来るかを考え易いプラン作成を心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の生活の様子は個別に記録し、体調に変化があった時や受診したときには受診記録を残し、職員間での共有に努めている。その中で介護計画の変更が必要になっていないかも検討している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人やご家族の状況に対して、できる限り柔軟な対応ができるよう取り組んでいる。自宅へ仏壇のお参りに行ったり、荷物を取りに行くこともある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ感染防止のためいろいろな制約を受けているため、ホーム内の活動がほとんどになっている。しかし、近くの公園への散歩をしたりと、身近な地域資源の利用はできている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からのなじみのかかりつけ医との関係を大切にしている。定期受診には主に職員が同行。受診での様子は家族に報告している。大事な時には家族にも受診同行してもらっている。	かかりつけ医は利用者・家族の希望を尊重し、それぞれの馴染みの医療機関となっている。かかりつけ医によって2週間、又は4週間の受診や往診で対応している。職員は日常の観察から小さな変化にも気づき、管理者に報告しかかりつけ医に相談する等、早めの対応を心掛けている。「受診時の状況」の記録を個別記録の中に閉じて情報を共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の体調管理や受診・薬の管理を担っている。また体調変化が見られた時には相談しアドバイスをもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には介護サマリーを病院に提供。主治医の病状説明には家族と共に同席して聞き、情報を共有して退院支援を行っている。常日頃より病院とは相談、連絡をして関係作りに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですべてできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・終末期ケアの対応指針を作成し、家族には入居時に当ホームですること、できないことを説明している。重度化した場合は家族と主治医を交えて何度も話し合いを重ね、互いが納得できる方針を出している。	入居時に重度化・終末期ケアについて説明し、状態の変化に応じて家族・主治医・ホームで話し合っている。家族が看取りを希望されギリギリの状態までみても、結果的には入院を希望されるため看取りの経験はない。病院で亡くなられた人の家族が遠方の為、家族に代わり葬儀の手配をして到着まで付き添った例がある。職員もお通夜に参列するなど、最期まで家族の様に愛情のある対応が見られた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変・事故発生時の対応については法人内での研修を行っている。また急変者が出たときには応援がすぐ駆け付けられるような体制を作っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回避難訓練を実施。日中・夜間を想定し入居者も一緒に訓練を行っている。火災だけではなく地震・水害災害の訓練を行い、災害対策として非常用食料等の備蓄なども心がけている。緊急時には近隣の特養や近隣住民との協力連携体制も築いている。	コロナ前は近隣の施設に散歩途中トイレを借りたり、イベントのポスターを張らせてもらうなど普段の付き合いを大切にしている。大雨や台風時には「大丈夫でしたか」「お米はありますか」等、声を掛け合い助け合っている。寒い時期の避難には畑のハウスを利用できることになっているなど、近隣の施設・住民・消防団員等の連携が出来ている。	非常食を利用者と職員が食して、味や食べやすさなどについて検討し、災害時に必要なもの、必要量などを話し合い、定期的に消費し補充する事で適切な管理に繋がると思われる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者個々が好む呼び方はあるが人格尊重に配慮した呼び方をしている。また個人情報に配慮し、記録や職員間での呼び方はインisialにしている。自室の入り口やトイレはドアとカーテンで二重にしプライバシー保護に努めている。	人権擁護についてユーチューブやDVDで定期的に研修し人権擁護の意識を高めている。言葉使いや呼称は本人が望み安心できることを大切にしている。トイレ・居室・脱衣室のドアの内側にカーテンをかけ、プライバシーを確保している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を尊重したケアができるよう心がけ、職員は会話の中でさりげない言葉の中から本人の思いや希望をつかみ取れるような努力を日々行っている。買い物、外出、入浴時間など本人の希望が少しでも叶うようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間・食事時間等それぞれの生活リズム・ペースに合わせて対応。入居までの生活ができ、その人らしさを失わないように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	できる限り、本人の意向に沿うような支援をしている。得意な職員が要望に沿って髪染め・カットを行っている。外出時にはできるだけおしゃれな服装で外出できるように勧めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	個々の好みや季節感を取り入れた献立を作っている。野菜の皮むき等の下ごしらえを職員と一緒にしたりしている。また移動販売で好きなものを買っておやつに食べたりしている。	利用者は頂いた野菜や移動販売で選んだ魚を前に、塩焼きがいい、煮付けがいいなど、調理方法や味付けを調理担当者に伝えており、利用者の食べたい料理を提供している。クリスマス会等の行事食、誕生日のお祝いの膳、駅弁大会の選ぶお弁当、また、時には買ったお弁当にする等、多様な食事を楽しむ支援が見られた。職員も利用者と同じ食事をとる光景は家庭的でぬくもりがある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量は毎回記録し、好みの味や器、声かけの工夫で必要量を接種できるように支援している。塩分制限、カロリー制限、服用薬との禁忌、嚥下障害等にも配慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者個々のできる範囲でもらっている。必要に応じて見守り、声掛け、一部介助等の口腔ケアの支援を行っている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の状況の確認・記録を行う。排泄パターンを把握することで、トイレへの声掛けをしたり、使用する尿取りパットを使い分けたりしている。	排泄は利用者の尊厳を守る事を大切に、失禁が無いよう努めている。排泄のタイミングの把握や適切な排泄用品を選択して、排泄の自立支援に努めている。トイレに置いた鈴で職員に合図をする利用者もあり、職員はその場から離れて見守り、安全・安心・羞恥心に配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動、食物繊維・水分の摂取を基本に便秘防止対策を行い、できるだけ自然排便があるように心がけている。主治医と相談して各個人に合う整腸剤便秘薬等を処方してもらい与薬時間や量を相談・検討しながら便秘防止対策を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2・3回のペースで入浴してもらっている。入浴時間帯を本人の希望に合わせて、長風呂が好きの方には、途中で水分補給をしながら入浴してもらったりして、それぞれが入浴を楽しめるような支援をしている。	利用者の身体状況により二人介助をして、全員が浴槽につかり、満足のいく入浴となっている。職員とゆっくりくつろげる時間は利用者にとっておしゃべりを楽しむ時間でもある。長湯の人はタイマーをかけジジリという音を合図に、自分から気持ちよく上がる工夫が見られた。しょうぶ湯・バラ湯・ゆず湯等、季節の湯を楽しむ機会がある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の生活リズム、その日の体調の状況に合わせて日中活動したり、休んだりしてもらっている。夕食後、眠たくなるまでリビングでくつろぐ方もいる。就寝中は室温調整等をして安眠できるような支援をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診後は必ず受診記録を書き、処方薬の変更があった時は、申し送りをして職員全員が把握できるようにしている。処方された薬の薬性は職員が確認場所に保管。また誤薬がないよう与薬前には個別トレーに準備した薬を複数の職員で確認している。さらに服用時はきちんと飲み込んでいるかも確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの状態に応じて調理の手伝い、洗濯物たたみ等無理なくできることを職員と一緒に役割を持った生活ができるよう支援している。また移動販売が来た時には、一緒に品物を見てから購入してもらったりもしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人の希望に合わせて、散歩、ドライブ、買い物等へ出かけてはいるが、コロナ感染拡大のため外出も制限されてする。以前は空気の入れ替えのため、自宅へ出かけ窓の開閉を行ったり、仏壇へ線香をあげに行ったりしていた。	コロナ禍の為、以前のような外出支援は出来ないが、感染対策を取り、花見や買い物、海を見に出かける等、気分転換を図っている。近くの団地に徒歩や車いす、車で出かけ花見を楽しんでいる。玄関前にベンチを用意し、敷地内の農園の野菜の手入れや収穫の様子を見たり、周囲の自然から四季の移ろいを感じている。	コロナ禍が終息した際は、以前のような利用者の個別の希望を取り入れた外出支援も期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	新型コロナにより外出も制限されつつあるが、買物が楽しめる人は職員と店へ行き、自分の気に入った物を買って支払いもしている。また、出かけることができない人も、毎週庭先まで来てくれる移動販売で好きなものを選んで買って楽しむ等、可能な限り行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があれば電話をかけたり、ご家族からの電話を取り次いだりしている。手紙やはがきがと届いたときには、職員が代読したりしてそれまでの絆が切れないよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	明るい南向きのリビングは窓から庭の花や畑の様子が眺められ、季節を感じることができる。また台所と一体化した空間であり、食事の準備の匂いや音を感じることもできる。トイレや浴室、脱衣所はバリアフリー対応。空調も直接風が当たらないような配慮をしている。	居室入り口の利用者と職員が手作りのネームプレートは色・柄と作風が異なり個性的で自分の部屋がよくわかる。居室からトイレまでの経路を、白いテープの矢印を床に張って分かり易くしている部屋もあった。居室前にあるベンチで友達でおしゃべりを楽しむこともできる。朝食をとっている人、起きて洗面所に向かう人、マイペースな時間が流れていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関や廊下にソファやベンチを置き、日中はそれぞれがホーム内で自由に過ごせるようにしている。リビングでの席の位置は入居者同士の関係性やその時の状況に合わせてその都度決めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れたものを持ってきてもらって、本人が不安なくで生活できるよう、家族の協力もお願いして支援している。	入居前に自宅を訪問し居室の環境を確認し、ベッドの位置や向きなど、出来る限り自宅に近い環境にして、戸惑いの無いよう配慮している。ベッド柵のかごに、リモコンや懐中電灯、ブラシや化粧品を身近に置き、自立と安心に繋げていた。また受診帰りに買ったという読みかけの週刊誌が無造作に置かれ、生活感があった。荷物があるとそれをまとめて不穩になる人の部屋はシンプルであり、個々に落ち着ける部屋となっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	屋内はバリアフリー対応、廊下には手すりを設置し、少しでも自立した生活ができるようにと思っている。入居したばかりの人が混乱しないようトイレから自室までテープで廊下に印をつけたりして環境づくりに努めている。		